

江戸時代における詠物詩の比較研究（要旨）

文学研究科博士課程後期

人間文化学 比較日本文化学

D135041 任 穎

1 研究背景と研究目的

本論文は、江戸時代における詠物詩についての比較研究である。日本最古の漢詩集『懷風藻』の中では、すでに物を詠う漢詩が現れていた。平安初期の勅撰三詩集『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』では、『文華秀麗集』に嵯峨天皇の梅花を中心に詠った「梅花落」があり、『経国集』には高田使の梅について詠んだ「奉和殿前梅花」のような物（梅）を主題とする作品が現れた。

五山文学の僧侶たちの詠物詩は主に中国の詠物詩の影響を受けたもので、平安時代よりも作品数は多くなった。主に植物について詠ったもので、動物などについてのものは極めて少ない。江戸時代になると、社会が安定して人々の生活も比較的豊かになり、都市文化の発展とともに、知識人の交際が頻繁になってくる。また、江戸前期頃には中国から詠物詩選が多く伝えられ、『詠物詩』や『詠物新題詩選』『佩文齋詠物詩選』『歴代詠物詩選』などが翻刻され、漢詩人たちの詠物詩の手本ともなっていた。そのため、詠物詩の数は非常に多くなり、表現も豊かになっている。それらの詠物詩を収集し、『日本詠物詩』という詩集も安永6(1777)年の春に刊行された。所収の詠物詩は江戸前期から中期までの545首である。

江戸前期から中期にかけて、個人の詠物詩集として松村梅岡の『梅岡詠物詩』と太田玩鷗の『玩鷗先生詠物詩百首』『玩鷗先生詠物雜体百首』などが見られる。また、詩人たちの各自の詩集にも詠物詩が多く収められている。江戸初期の林羅山が詠んだ詠物詩の数は多く、内容においても豊かな題材を取り入れている。また、彼は五山の僧侶の詠物詩の伝統を受け継ぎながら、自分なりの時代感を詩において表現しようという努力が見られる。羅山が可能な限り、多彩な題材を詠う性格と異なって、丈山の詠物詩は桜の詩と牡丹の詩が多く見られる。彼らの詠桜詩について、羅山の詠桜詩にはよく「花」や「櫻花」という詩題が見られるが、丈山の詠桜詩には「拍毬櫻」「絲櫻」「彼岸櫻」なども詩題に見られる。

また、伊藤仁斎の詠物詩では、彼の詠梅詩には家族や友人との梅の花見を詠う作品が見られる。仁斎の詠桜詩においては、当時江戸前期の花見の名所に尋ねて詠う作品が何首か見られ、桜の名所を巡る花見は文人の趣味の一つとなったことが窺える。また、新井白石の牡丹詩を考察すると、当時丈山のような盛唐詩の典拠や表現を踏まえて牡丹を詠じるのは流行りだが、白石はその流行りに少し変化を加えようという姿勢が見られる。

江戸後期では、詠物詩はかなり広く流行しており、前期や中期より多くの個人的な詠物詩選が刊行された。また、この時期の漢詩人たちの詩集の中には詠物詩が多く詠まれていたことがわかる。例えば、市河寛齋の『寛齋摘草』と『寛齋先生遺稿』の中には、約 120 首の詠物詩が詠まれている。特に、『寛齋先生遺稿』巻三の中には身近な文房四宝など器物を詠う 50 首の詠物詩が収められている。また、大窪詩仏の詠物詩（約 180 首）では、蝶・竹・梅・桜など豊富な詩題を用いて、『詩聖堂詩集』初編から二編にかけて、連作の詠物詩を詠んだような例は多く見られる。さらに、柏木如亭には『詩本草』という詠物詩集がある。このように、江戸後期の詩人たちの詩集を探ってみると、特に新しい清新性霊の詩風に影響された詩人たちが、多くの詠物詩を詠んだことがわかる。

これまでの江戸期の詠物詩に関する先行研究については、揖斐高『江戸詩歌論』（汲古書院、1998 年）で、『日本詠物詩』に言及されている以外、専論は見られない。また、こうした詠物詩に対しての注釈書なども未見である。江戸後期の詠物詩について、例えば菅茶山の詠物詩に関する研究には、ある特定のモチーフを選択し検討した朱秋而氏「菅茶山の秋蛩詩——『鈴虫』との関わりをめぐって」（『国語国文』第 72 号、京都大学国文学会、2003 年）がある。朱氏は、一つの詩語「鈴虫」（秋に鳴く虫）を手がかりとして、茶山の独特の美意識を検討している。また、小財陽平氏は「茶山詩風の転換」（『近世文芸 研究と評論』第 69 号、日本近世文学会、2005 年）において、茶山の詠蘭詩を陸遊の詠蘭詩と比較して研究しており、「茶山詠石詩試解」（『近世文芸 研究と評論』第 68 号、2005 年）では、『黄葉夕陽村舎詩集』中の詠石詩における茶山の「独自性」を検討している。しかし、これらの研究はあるモチーフをテーマとし、具体的な表現を検討することを中心とするものである。そして、菅茶山の詠物詩における中国の詠物詩との影響関係や同時代の詩人との比較研究などの視点から見れば、未だ十分とは言えない。また、江戸前期から江戸後期にかけて、詠物詩が時代の詩風とともに、変化していた傾向もこれらの研究から見出すことはできない。

2 研究対象と研究方法

本研究では、まず日本漢詩における詠物詩の歴史を考察する。日本最古の漢詩集『懷風藻』の中には、漢詩 120 篇が収められている。『懷風藻』の中に詠物詩と思われる 8 首の作品が見られる。『懷風藻』の詠物詩では、どのように「物」が詠まれたのか。また、それらの作品は後代の詠物詩において、どのような影響を与えたのか。日本漢詩における詠物詩を考察する際、それらの詩はどのような位置付けがなされるのかについて検討した。『懷風藻』の中で詠物詩と思われる 8 首の作品を例として分析し、以上のような点について論述する。

また、平安初期に嵯峨天皇の勅命によって弘仁 5 (814) 年に編纂された漢詩集『凌雲集』の詠物詩を取り上げる。それらの作品は一体どのような特徴を持っているのか。また、『懷風藻』と比較して、詠物の題材や詠物詩の数などの面において、どのように発展したのかについて具体的な例をあげながら検討した。

次に、『文華秀麗集』は、弘仁 9 (818) 年に嵯峨天皇 (786-842) の勅命によって編集された。『文華秀麗集』には遊覧・宴集・餞別・贈答・詠史・述懷・艶情・樂府・梵門・哀傷・雜詠という部立がある。詠物詩と思われる作品は「樂府」・「雜詠」部に見られる。「樂府」部に 4 首、「雜詠」部には 48 首、合わせて 52 首の詠物詩が収められている。「樂府」部に収める嵯峨天皇の「梅花落」と菅原道眞の「奉和梅花落」は初めての梅を主題として詠う詩である。『懷風藻』や『凌雲集』と比較して、これらの作品にはどのような特徴があるのか。また、『文華秀麗集』では新たな詠物詩の題材が現れているのかについて、「樂府」部と「雜詠」部の詩を読解しながら考察した。

さらに、淳和天皇の勅命によって天長 4 (827) 年に編まれた『経国集』に見られる詠物詩に目を向ける。『経国集』の「樂府」部に 6 首、「雜詠」部に 157 首、合わせて 163 首詠物詩が見られる。『経国集』に見られる詠物詩を取り上げ、それらの詩にはどのような特徴が潜んでいるのか。また、『懷風藻』、『凌雲集』、『文華秀麗集』の詠物詩の表現と比較すると、どのような発展を遂げているのかについて検討した。

最後に、鎌倉時代の詠物詩を検討する。五山の僧侶は詠物詩を愛誦している。本研究では五山の僧侶の詩集を取り上げ、彼らの詠物詩と思われるものを整理した。また、それらの作品に見られる五山文学の詠物詩の特徴を探ってみた。また、五山文学の詩は後世の詠物詩にどのような影響を与えたのかについても考察を加えた。

江戸前期から中期かけて、前代には見ることのない多くの詠物詩が詠まれている。まず、林羅山について、『林羅山詩集』にある詠物詩を研究対象にし、従来の研究に見られない江戸初期の詩人である林羅山の詠物に対しての認識を明らかにする。また、彼の詠物詩を挙げながら、五山の僧侶よりどういった面において発展が見られ、どのような特徴を持っているのかについて検討したい。さらに、今まで評価されていない彼の、江戸初期の詩壇において詩の創作活動の位相を、より精確に描き出した。

次に、石川丈山の詠物詩を検討した。丈山に関する先行研究を踏まえ、未だに見られていない丈山の詠物詩を取り上げ、そこから丈山が「日東之李杜」として評価される理由を探ってみた。また、丈山が近世初期の詩人として、彼の詠物詩において、どのような特徴して現れているのかについて考察した。

さらに、伊藤仁斎の詠物詩を取り上げた。仁斎の『古学先生詩集』の中では、詠物詩として見られる作品は全部で124首であり、そのうち詠花詩は44首が見られる。彼の詠花詩に焦点を当て、それらの作品はどのような特徴が潜んでいるのかについて考えた。

最後に、先行研究に見ることのできない新井白石の詠物詩について考察する。白石の『白石詩草』と『白石先生餘稿』の中に、詠物詩と思われる作品を研究対象とし、それらの詩の特徴を検討した。またそれらの作品は後世においてどのような影響を与えたのかについて論じる。また、『日本詠物詩』に収めている詠物詩を中心に、荻生徂徠・高野蘭亭・祇園南海・室鳩巢・梁田蛻巖らの作品を取り上げ、それぞれどのような傾向が見られるのかについて検討する。

江戸後期の詠物詩については、新しい清新性霊派の詩風の先駆者である六如上人と、同じく宋詩を手本とする日常的な詩情に富んだ平明な詩風を主張する菅茶山の詠物詩をはじめ、「江戸の四詩家」と呼ばれている大窪詩仏・市河寛斎・柏木如亭・菊池五山などの作品を取り上げた。

江戸後期の詠物詩について、例えば新しい宋詩風を積極的にとり入れた菅茶山の作品については、まず菅茶山の詠物詩に関する先行研究を検討し、その問題点を明らかにした上で、江戸後期詩人である菅茶山の「詠物詩」の概念を明確にしたい。詠物については、その対象ごとに分類し、それぞれの対象を描く詠物詩をまとめ、詩人ごとの詠物詩の特徴を探っていく。このような考察によって、菅茶山の詠物詩の特徴が把握できると考える。

次には、新詩風を積極的に取り入れた大窪詩仏・市河寛斎・柏木如亭・菊池

五山の詠物詩を考察したい。市河寛齋の『寛齋摘草』と『寛齋先生遺稿』には、寛齋の詠物詩が約 120 首収められている。そのうち器物を詠ったものは 55 首があり、『寛齋先生遺稿』巻三の中に収められている。それらを考察することによって、江戸後期の漢詩人がどのように身の回りの文房四宝を詠い、またそれらを贈り物として交流を行っていたのかということが明らかにできる。

また、大窪詩仏の詠物詩研究については、『詩聖堂詩集』（初編、二編、三編）の詠物詩を抽出し、詩題ごとにまとめる。江戸中後期にすでに日本にもたらされた中国の詠物詩選を参考とし、それぞれのテーマごとに分けて分析する。先行研究を踏まえて、詩仏自身が書いた付記を参考にしながら、詠物詩の内容を分析する。それに加えて他の同時代の詩人による詠物詩の評価にも目を向けたい。以上のような考察によって、詩仏の詠物詩はどのような点で中国の詠物詩から影響を受けたのかについて明らかになると思われる。

詩仏の詠物詩の中で、『詩聖堂詩集』初編の巻一の中に収められている特徴的な連作の詠蝶詩を例として取り上げ、それら 10 首の作品の内容や詩仏自身が書いたコメントから詩仏の詠蝶詩の特徴を探ってみた。これらの作品の中では、どのように中国の詠蝶詩を受容したのかについても考察する。さらに、江戸後期の漢詩人で、詩仏と交流があった菅茶山・頼山陽・市河寛齋・柏木如亭などの詠物詩に触れながら、江戸後期の詠物詩の中での詩仏の詠物詩の位置付けを考えてみた。江戸後期、詠物詩が流行している詩壇の中で、「江戸の四詩家」と呼ばれている大窪詩仏の詠物詩の中には、どのように詩仏の「清新性靈」が表現されているのかについても、詳しく考えてみた。

次に、柏木如亭の『詩本草』では、如亭が全国各地を遊歴した時に出会った珍味佳肴を詠い、そこには「蕎麦」「太刀魚」など有名な詠物の作品も収められている。『詩本草』四十八段の中で、最も詠まれたのは「魚」である。「大刀魚」「鯛」「鯉」「鱸魚」などの作品があり、「余の性、魚を好む」という表現も『詩本草』の中で見られる。本研究では、柏木如亭が詠んだ詠魚詩を例としてとりあげ、また漢詩に関する如亭自身が書いた散文などにも注目し、柏木如亭の詠魚詩の特徴を探る。

最後に、ほかの詩人たち、西山拙齋・頼春水・柴野栗山・葛子琴・菊池五山らの詠物詩を取り上げ、深く読解していくことにより、彼らの詠物詩の中でどのような特徴を持っているのかを明らかにした。